

大阪府公立高等学校における知的障がい生徒の受入れに関する研究 －知的障がい生徒自立支援コース・共生推進教室に着目して－

Study on Acceptance of Students with Intellectual Disabilities at Osaka Public High School: Focusing on the Independence Support Class for Intellectual Disabled Students and the Coexistence Promote Class

中野 雄基* 石倉 健二**
NAKANNO Yuki ISHIKURA Kenji

本研究では、大阪府立公立高等学校における「知的障がい生徒自立支援コース」と「共生推進教室」の生徒（以下：自共生徒）が特別活動及び部活動で他の高校生とともに活動することで得られた成果について検討を行った。2019年度に第一学年と第二学年の自共生徒に対して指導を行っていた教員を対象に調査を行い、自立支援コースでは7校43名、共生推進教室では7校38名の教員から回答を得た。分析の結果、以下のような結果を得た。①自共生徒に共通して、特別活動全般において「共に協力できる」ことが示唆された。②自立支援コース生におけるホームルーム活動及び学校行事は1年目、③自立支援コース生における委員会活動及び生徒会活動、共生推進教室生における特別活動全般は2年目、他の高校生と一緒に参加することの成果が多く見られた。④特別活動全般における交友関係及び対人スキルに関する良い変化が多く見られ、⑥部活動では、自共生徒のどちらにも交友関係に関する良い変化が多く見られた。

キーワード：知的障がい生徒自立支援コース、共生推進教室、特別活動、部活動、高等学校

Key words: independence support class for intellectual disability, promoted class for inclusion, special activities, extracurricular activities, high school

I. 問題と目的

1. 大阪府公立高等学校における取組み

大阪府では1970年代から障害児と呼ばれる子どもたちを地域の小中学校で受け入れてきた（山口，2011）。しかし中学校卒業後の進路となると、障がいのある生徒は進学を断念するか、養護学校高等部へ進学になることがほとんどであった（和田，2019）。そうした中で大阪府立松原高校では1978年から、ある中学校出身の生徒が中心となり、「中学校まで障がいのある生徒とともに学んできたのに、高校で学べないのはおかしい。一緒に学ぶ機会がほしい。」と訴え、学籍はないものの、中学校時代の同級生を学校に連れてきていた（和田，2019）。そして、学校も「準校生」としてこの交流を認めていた（和田，2019；平野，2013；富田，2005）。

そして大阪府立柴島高校でも同様に、1979年から、入学や卒業は正式に認められてはいないものの、実際の学校生活は他の生徒とともに過ごす場が与えられる「準校生」という形で受け入れてきた。また大阪府立西成高校では、定員割れ不合格を出さない方針のもと、知的障がいのある何人かの生徒を入学・卒業させていた（富田，2005）。こうした「準校生」の取組の背景には、解放教育運動と越境反対などの教育に関する差別撤廃運動があり、つまるところ差別を許さない学校（集団）作りを目標に松原高校、柴島高校は創設された（平野，2013）。

そして、「準校生」としての取組が20年以上にわたって継続された。

2. 知的障がい生徒自立支援コース・共生推進教室

こうした経緯により、2000年7月に大阪府教育委員会は「知的障害のある生徒の後期中等教育の充実方策」について大阪府学校教育審議会に諮問を行い、その主要テーマの一つである「高等学校における知的障害のある生徒の受入れ方策」について、大阪府学校教育審議会障害教育専門部会で審議が重ねられた。そして、2001年度から2005年度までの5年間にわたって、「知的障害のある生徒の高等学校受入れに係る調査研究」を実施し、2006年4月より、府立高等学校における知的障がいのある生徒の教育環境整備事業の制度が開始された（大阪府教育庁，2017）。

それによって整備された制度のもと、知的障がい生徒自立支援コース（以下：自立支援コース）の生徒（以下：コース生）は高等学校に在籍し、高等学校学習指導要領に従った教育課程で学び、共生推進教室の生徒（以下：教室生）は、高等学校を学びの場として特別支援学校高等部の学習指導要領に従った教育課程で学んでいる。そしてコース生及び教室生（以下：自共生徒）は、他の高校生とともに授業や学校行事、部活動への参加をしている。

* 堺市立浜寺南中学校

** 兵庫教育大学大学院特別支援教育専攻障害科学コース 教授

3. 特別活動と部活動

高校時代では一般的に、教科の学び以外に、集団の中で人生の糧となるような重要な学びや体験がある。そのような教科の学び以外の活動の中には、特別活動（ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事）や部活動等がある（以下：特別活動等）。

2009年告示高等学校学習指導要領における特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」であり、部活動は、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。」とされている。

加えて、特別活動では、子どもたちの表現力を高め、さらに他者との協力を通して達成感が得られ（中村・岡邑, 2018）、集団活動を特質とする教育活動であり、豊かな人間性や社会性の育成に貢献している（堀・濱口, 2018）。また、学校行事体験がライフイベントとして個人の発達において重要な意味を有する（河本, 2014）とされている。部活動においては、部活動参加は生徒の学校適応を増大させ（白松, 1997）、教科だけでは達成できない総合的な教育を担っている（岸本, 2018）。また社会性や個性、自主性などの人間形成にとって重要なスキルを育成する機会であり（小林, 2012）、教科などの座学では得られない生徒集団の人間関係によって全面的に調和のとれた人格を培う（織田, 2011）とされている。

4. 本研究の目的

以上のように、特別活動等では、生徒が様々な集団や人間関係を体験し、生涯にわたり大きな影響を与えると考えられ、自共生徒にとっても新たに独自の学びや体験があると考えられる。しかしこうした側面の成果について、学校行事への参加や部活動への70%の入部率、大会出場といった報告（大阪府教育庁, 2017）にとどまっており、その成果について十分に検討されているとは言い難い。

そこで本研究では、自共生徒が特別活動等で他の高校生とともに活動することで得られた成果について明らかにし、自共生徒が特別活動等で他の高校生とともに活動し、豊かな高校生活を送るために必要となる方策を検討するものである。

II. 方法

1. 調査対象と調査期間

2019年度に第一学年及び第二学年の自共生徒に対して指導・支援していた教員を対象として、担当していた生徒1人につき1部の質問紙を配布した。

調査期間は2020年7月であった。

2. 研究の説明と承認

大阪府教育庁の担当指導主事と協議したのち、調査対象校に郵送によって調査依頼文と質問紙の配布と回収を行った。

3. 質問項目の内容

質問項目は、平成21年告示高等学校学習指導要領における第一章総則及び第五章特別活動の目標に示されている内容に沿ったものと、先行研究（樽木・石隈, 2006；廣瀬・矢野・梶川, 2010；河本, 2014；河本, 2015；小野・庄司, 2015；中村, 2015；樽木・高田, 2017；高瀬・長島・久永, 2017；川口, 2018；中村・岡邑, 2018；鈴木・岡邑・歌川・中村, 2019）より一般性が検討されたものを参考にして作成した。項目数はフェイスシート4項目、選択式3項目、自由記述式4項目の計11項目であった。

質問内容は、回答者の属性、学年、部活動所属の有無と所属名、委員会活動及び生徒会活動所属の有無と所属名、特別活動全般における交友関係や他者に対する行動の変化、ホームルーム活動における参加の仕方又は役割、ホームルーム活動における生徒の成長や体験、学校行事における生徒の成長や体験、学校行事における参加の仕方又は役割、委員会活動又は生徒会活動における成長や体験、部活動における交友関係の変化や他者に対する行動の変化の11項目であった。

III. 結果と考察

1. 基本情報

(1) 自立支援コースについて

自立支援コース設置校11校に配布し、7校から返送（回収率63.6%）があり、計43名の教員からの回答があった。昨年度のコース生との関係について、複数回答で得た結果、多かったのが自立支援コース担当34名、担任21名であった（Table 1）。

11校の入学選抜における受入れ人数は72名であるが、回答が得られた7校に在籍する1年生が20名、2年生が23名の計43名であった。部活動に所属していた者が33名（76.7%）で、大半の生徒は部活動に所属していた。所属している部活動で多いものはインフィニティサークル、ボランティア部、水泳部であった（Table 2）。

Table 1 回答者の昨年度のコース生との関係
(複数回答)

コース生との関係	人数
自立支援コース担当	34
担任	21
学校コーディネータ	8
部活動顧問	5
副担任	3
自立支援コーディネータ	3

Table2 部活動リスト（複数回答）

部活動名	人数	部活動名	人数
インフィニティ サークル	8	吹奏楽部	2
ボランティア部	4	野球部	2
水泳部	4	書道部	2
パソコン部	2	その他	15
茶道・茶華道部	2		

Table5 部活動リスト（複数回答）

部活動名	人数	部活動名	人数
美術部	4	吹奏楽部	3
陸上部	4	園芸部	2
水泳部	3	バスケットボ ール部	2
茶道部	3	その他	11
パソコン部	3		

Table3 所属している委員会（複数回答）

委員会名	人数	委員会名	人数
クラス係・委員	5	選挙管理委員	2
交流会委員	3	風紀委員	2
図書委員	3	後期文化委員	2
庶務委員	2	その他	4
保健委員	2		

Table6 所属している委員会（複数回答）

委員会名	人数	委員会名	人数
クラス係・委員	6	庶務委員	2
保健委員	3	その他	7

Table4 回答者の昨年度の教室生との関係
（複数回答）

教室生との関係	人数
共生推進教室担当 担任	25 11
部活動顧問	1

委員会活動に参加している者は24名（55.8%）で、過半数の者が委員会活動に参加していた。所属している委員会が多いのはクラス係・委員、交流会委員、図書委員で、生徒会執行部に所属している者も1名あった。（Table 3）。

(3) 共生推進教室について

共生推進教室設置校8校に配布し、7校から返送（回収率87.5%）があり、計38名の教員からの回答があった。そのうち、回答に不備が見られた2名を除く36名の回答を有効回答とした。昨年度の教室生との関係につい

Table7 ホームルーム活動の役割や影響

	1年生		2年生	
	コース生(N=20) 人数(%)	教室生(N=18) 人数(%)	コース生(N=23) 人数(%)	教室生(N=18) 人数(%)
①ホームルームや学校での生活をよりよくするための自己の課題を見いだした	4 (20.0%)	2 (11.1%)	0 (0.0%)	3 (16.7%)
②集団におけるより良い行動の仕方を身に付けた	12 (60.0%)	10 (55.6%)	6 (26.1%)	10 (55.6%)
③他の生徒と協力して作業や活動に参加できた	13 (65.0%)	12 (66.7%)	14 (60.9%)	12 (66.7%)
④役割分担に貢献した	3 (15.0%)	12 (66.7%)	7 (30.4%)	12 (66.7%)
⑤学校・ホームルームへの所属意識が高まった	14 (70.0%)	3 (16.7%)	7 (30.4%)	11 (61.1%)
⑥集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだした	10 (50.0%)	4 (22.2%)	6 (26.1%)	1 (5.6%)
⑦集団や自己の生活、人間関係の課題の解決に取り組めた	5 (25.0%)	3 (16.7%)	3 (13.0%)	0 (0.0%)
⑧他の生徒と合意形成や意思決定ができた	9 (45.0%)	5 (27.8%)	3 (13.0%)	4 (22.2%)
⑨学校生活及び人間関係をよりよく形成した	9 (45.0%)	6 (33.3%)	8 (34.8%)	5 (27.8%)
⑩人間としての在り方生き方についての自覚を深めた	1 (5.0%)	0 (0.0%)	1 (4.3%)	1 (5.6%)
⑪自己実現を図ろうとする態度を養った	4 (20.0%)	2 (11.1%)	6 (26.1%)	2 (11.1%)

て、複数回答で得た結果、多かったのが共生推進教室担当25名、担任11名であった (Table 4)。

8校の入学者選抜における受入れ人数は48名であるが、回答が得られた7校のうちの有効回答は、1年生が18名、2年生が18名の計36名であった。部活動に所属していた者が30名 (83.3%) で、大半の生徒は部活動に所属していた。所属している部活動で多いものは美術部、陸上部、水泳部など様々であった (Table 5)。

委員会活動に参加している者は15名 (41.7%) であり、所属している委員会が多いのはクラス係・委員、保健委員、庶務委員であった (Table 6)。

2. 結果

本調査から、自共生徒が特別活動等で他の高校生とともに活動することについての調査結果を以下に示す。なお、50%以上の回答が認められた項目を大きな特徴のあったものとして示す。

(1) ホームルーム活動の役割や影響 (Table 7)

コース生と教室生のそれぞれについて、ホームルー

ム活動の果たした役割や与えた影響に関する回答結果を Table 7 に示す。大きな特徴がみられたのは以下の点である。

「②集団におけるより良い行動の仕方を身に付けた」については、自共生徒の1年生と教室生の2年生において50%を超えている。

「③他の生徒と協力して作業や活動に参加できた」については、自共生徒の1年生と2年生において50%を超えている。

「④役割分担に貢献した」は、教室生の1年生と2年生が50%を超えている。

「⑤学校・ホームルームへの所属意識が高まった」については、コース生の1年生が70%と高く、教室生の2年生において50%を超えている。

「⑥集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだした」については、コース生の1年生で50%となっている。

(2) 学校行事の役割や影響 (Table 8)

コース生と教室生のそれぞれについて、学校行事の果たした役割や与えた影響に関する回答結果を Table 8 に

Table8 自共生徒の成長や体験における学校行事が果たした役割や与えた影響

	1年生		2年生	
	コース生(N=20) 人数(%)	教室生(N=18) 人数(%)	コース生(N=23) 人数(%)	教室生(N=18) 人数(%)
①いろいろな人の考えや意見を聞く力が身についた	8 (40.0%)	9 (50.0%)	3 (13.0%)	8 (44.4%)
②他の生徒と深く関われるようになった	12 (60.0%)	7 (38.9%)	8 (34.8%)	10 (55.6%)
③公共の精神が養われた	6 (30.0%)	3 (16.7%)	3 (13.0%)	1 (5.6%)
④進路や授業などに対する更なる傾倒がみられた	5 (25.0%)	4 (22.2%)	4 (17.4%)	2 (11.1%)
⑤目標を設定し、その目標に向かって行動できるようになった	5 (25.0%)	3 (16.7%)	2 (8.7%)	1 (5.6%)
⑥他者への意識が高まった	11 (55.0%)	9 (50.0%)	7 (30.4%)	10 (55.6%)
⑦自己の表現力が高まった	9 (45.0%)	5 (27.8%)	6 (26.1%)	8 (44.4%)
⑧他の生徒と合意形成や意思決定ができた	9 (45.0%)	4 (22.2%)	3 (13.0%)	5 (27.8%)
⑨学校生活及び人間関係をよりよく形成した	12 (60.0%)	8 (44.4%)	6 (26.1%)	9 (50.0%)
⑩人間としての在り方生き方についての自覚を深めた	2 (10.0%)	0 (0.0%)	1 (4.3%)	0 (0.0%)
⑪自己実現を図ろうとする態度を養った	1 (5.0%)	1 (5.6%)	6 (26.1%)	1 (5.6%)
⑫他の生徒と協力して学校行事に参加できた	18 (90.0%)	13 (72.2%)	13 (56.5%)	9 (50.0%)
⑬学校・ホームルームへの所属意識が高まった	11 (55.0%)	6 (33.3%)	7 (30.4%)	9 (50.0%)
⑭当該生徒を含めた集団はまとまって活動できた	12 (60.0%)	5 (27.8%)	8 (34.8%)	6 (33.3%)
⑮中心的役割又は自身の役割を見つけようとする言動・様子がみられた	2 (10.0%)	3 (16.7%)	3 (13.0%)	1 (5.6%)

Table9 委員会活動及び生徒会活動の役割や影響

	1 年生		2 年生	
	コース生(N=12)	教室生(N= 7)	コース生(N=11)	教室生(N= 5)
	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)
①自発的・自治的活動の体験が得られた	2 (16.7%)	2 (28.6%)	5 (45.5%)	3 (60.0%)
②他の生徒と協力して作業や活動できた	10 (83.3%)	6 (85.7%)	7 (63.6%)	2 (40.0%)
③望ましい人間関係を形成した	2 (16.7%)	2 (28.6%)	6 (54.5%)	0 (0.0%)
④主体的に考え、話したり行動できた	4 (33.3%)	0 (0.0%)	1 (9.1%)	3 (60.0%)

示す。大きな特徴がみられたのは以下の点である。

「①いろいろな人の考えや意見を聞く力が身についた」は、教室生の1年生において50%であった。

「②他の生徒と深く関われるようになった」は、コース生の1年生、教室生の2年生で50%を超えている。

「⑥他者への意識が高まった」は、自共生徒の両方の1年生と教室生の2年生において50%を超えている。

「⑨学校生活及び人間関係をよりよく形成した」がコース生の1年生、教室生の2年生で50%以上である。

「⑫他の生徒と協力して学校行事に参加できた」は自共生徒のいずれの学年においても50%を超えており、特に1年生においては高い値を示している。

「⑬学校・ホームルームへの所属意識が高まった」については、コース生の1年生、教室生の2年生で50%以上となっている。

「⑭当該生徒を含めた集団はまとまって活動できた」は、コース生の1年生において、50%を超えている。

(3) 委員会活動及び生徒会活動の役割や影響 (Table 9)

コース生と教室生のそれぞれについて、委員会活動及び成果と会活動の果たした役割や与えた影響に関する回答結果を Table 9 に示す。大きな特徴がみられたのは以下の点である。

「①自発的・自治的活動の体験が得られた」は、教室生の2年生において50%を超えている。

「②他の生徒と協力して作業や活動できた」は、自共生徒の1年生とコース生の2年生で50%を超えており、特に自共生徒の1年生においては高い値となっている。

「③望ましい人間関係を形成した」は、コース生の2年生で50%を超えている。

「④主体的に考え、話したり行動できた」は、教室生の2年生で50%を超えている。

(4) ホームルーム活動への参加の仕方や役割 (Table 10)

コース生と教室生のそれぞれについて、学校行事への参加の仕方や役割に関する回答結果を Table 10 に示す。

Table 10 ホームルーム活動への参加の仕方や役割

	内容	人数 (%)
コース生 (N=43)	・他の生徒と同様にクラスのホームルーム活動に参加していた。	15 (34.9%)
	・クラスの一員として、自然な形で役割を果たしていた。	13 (30.2%)
	・教室では、一番前の席に座り、前に立つ人の話をしっかり聞いて理解しようとする姿が見られた。	7 (16.3%)
教室生 (N=36)	・グループの中で与えられた役割はしっかりと果たしていた。	13 (36.1%)
	・ほとんどすべての活動に、教員が支援する場面なく、他の生徒と同様に参加した。	9 (25.0%)
	・グループ活動をする際には、他の生徒とコミュニケーションが取れていた。	6 (16.7%)

Table 11 学校行事への参加の仕方や役割

	内容	人数 (%)
コース生 (N=43)	・各ホームルームで生徒たちの話し合いで決まった役割を担当した。	33 (76.7%)
	・クラスメイトと同じように参加し、役割も同じように決めていた。	14 (32.6%)
	・積極的に行事に参加し、笑顔がたくさん見られた。	8 (18.6%)
教室生 (N=36)	・クラスメイトと協力して、与えられた役割をこなすことができた。	20 (55.6%)
	・特別な支援・配慮なく、他の生徒と同様に参加した。	14 (38.9%)
	・周りの生徒の様子を見て、同じように行動することができた。	4 (11.1%)

大きな特徴は認められなかったが、コース生においては「他の生徒と同様にクラスのホームルーム活動に参加していた。」「クラスの一員として、自然な形で役割を果たしていた。」が30%を超えている。また教室生においては、「グループの中で与えられた役割はしっかりと果たしていた。」が30%を超えている。

(5) 学校行事への参加の仕方や役割 (Table 11)

コース生と教室生のそれぞれについて、学校行事への参加の仕方や役割に関する回答結果を Table 11 に示す。

コース生については、「各ホームルームで生徒たちの話し合いで決まった役割を担当した。」が70%を超える高い値を示した。また教室生においては、「クラスメイ

Table 12 特別活動を通じた交友関係等の変化

	内容	人数 (%)
コース生 (N=43)	・特別活動全般においては、集団の中で交友関係を構築できた。	22 (51.2%)
	・はじめは無口であったが、次第に慣れて、自分らしく振舞えるようになった。	8 (18.6%)
	・自分の役割を認識し、周りと協力して作業をすることができていた。	7 (16.3%)
教室生 (N=36)	・教室生とその他の生徒の双方向的なコミュニケーションが見られた。	14 (38.9%)
	・人の話を聞いて行動できるようになった。	12 (33.3%)
	・交友関係や他者とのかかわりを広げる一助となった。	11 (30.6%)

Table 13 部活動を通じた交友関係等の変化

	内容	人数 (%)
コース生 (N=43)	・同級生とはお互いに理解しながらとてもよい関係を築いている。	11 (25.6%)
	・積極的に人とかかわろうとする行動がみられるようになった。	9 (20.9%)
	・コミュニケーション能力の向上がみられた。	8 (18.6%)
教室生 (N=36)	・行事ごとで掃除や片付け、準備、買い出しなど、率先して役割を果たした。	8 (18.6%)
	・校内の先輩や学外の生徒と交流し、コミュニケーションスキルが向上した。	11 (30.6%)
	・下級生に対して優しく接した。	8 (22.2%)
	・共生やクラスの友達以外の交友関係が広がった。	8 (22.2%)

トと協力して、与えられた役割をこなすことができた。」が50%を超えている。

またコース生の「クラスメイトと同じように参加し、役割も同じように決めていた。」と教室生の「特別な支援・配慮なく、他の生徒と同様に参加した。」において30%を超えている。

(6) 特別活動を通じた交友関係等の変化 (Table 12)

コース生と教室生のそれぞれについて、特別活動を通じた交友関係等の変化に関する回答結果を Table 12 に示す。

コース生において、「特別活動全般においては、集団の中で交友関係を構築できた。」という回答が50%を超えている。

教室生において大きな特徴は認められなかったが、「教室生とその他の生徒の双方向的なコミュニケーションが見られた。」「人の話を聞いて行動できるようになった。」「交友関係や他者とのかかわりを広げる一助となった。」のいずれにおいても30%を超えている。

(7) 部活動を通じた交友関係等の変化 (Table 13)

コース生と教室生のそれぞれについて、部活動を通じた交友関係等の変化に関する回答結果を Table 13 に示す。大きな特徴は認められなかったが、教室生において「校内の先輩や学外の生徒と交流し、コミュニケーションスキルが向上した。」が30%を超えている。

3. 考察

(1) 活動への参加や役割分担

Table 7～12を通して大きな特徴として挙げられる項目で目立つものに「作業や活動に参加できた」「役割分担」に関するものがある。

Table 7では、「③他の生徒と協力して作業や活動に参加できた」は自共生徒の1年生、2年生のいずれにおいても比較的高く、「④役割分担に貢献した」は自共生徒の2年生で比較的高かった。同様に、Table 8「⑫他の生徒と協力して学校行事に参加できた」も全体的に高く、特に1年生においては高い値を示している。Table 9の「②他の生徒と協力して作業や活動できた」においても同様の結果が認められる。また、Table 11においても、コース生の「各ホームルームで生徒たちの話し合いで決まった役割を担当した。」と教室生の「クラスメイトと協力して、与えられた役割をこなすことができた。」も高い値を示している。

こうしたことから、ホームルームや学校行事、委員会活動及び生徒会活動において目立つ特徴としては、他の生徒と一緒に作業や活動に参加し、全体の中での役割を担うことができることが挙げられる。これは障がいがある生徒が共に学ぶことの第一歩として重要であり、共に学び・共に生きることについての初期段階の課題を達成できていることを示していると考えられ、大きな成果と言える。

さらに詳細に見た場合に、Table 8「⑫他の生徒と協力して学校行事に参加できた」と Table 9の「②他の生徒と協力して作業や活動できた」は、2年生よりも1年生の方が高い値を示している。加えて、Table 7「④役割分担に貢献した」が高くなっているのは2年生の方である。

これらのことから、「他の生徒と一緒に作業や活動に参加」することは1年生で表れやすく、「役割分担」に関することは2年生で表れやすいと考えられる。すなわち、1年生の段階ではまずはみんなと一緒に活動すること、活動に参加することが可能となり、それを基盤として役割分担に進むことができていると考えることができる。

(2) 行動や人間関係の変容

Table 7～12を通してみられる大きな特徴の1つに、「行動や人間関係の変容」に関するものがある。

Table 7の「②集団におけるより良い行動の仕方を身に付けた」では、自共生徒の1年生と教室生の2年生で50%を超えている。また、Table 8「①いろいろな人の考えや意見を聞く力が身についた」「②他の生徒と深く関われるようになった」「⑨学校生活及び人間関係をよりよく形成した」で50%を超えているところが散見される。加えて Table 9「③望ましい人間関係を形成した」「④主体的に考え、話したり行動できた」でも50%を超えている部分があり、Table 12のコース生で「特別活動全般においては、集団の中で交友関係を構築できた。」が比較的高い。

こうしたことから、ホームルームや学校行事、委員会活動及び生徒会活動などにおける特徴として、生徒の行動や対人関係の変容を挙げることができる。上述 (1) ほど目立つ特徴ではないものの、「一緒に作業や活動に参加し」「役割を担う」ことだけにとどまらず、それが自共生徒の行動や対人関係の変容につながることを示唆される結果であり、成果の1つと言える。

(3) 意識の変容

Table 7～8からみられる大きな特徴の1つに、「意識の変容」に関するものがある。

Table 7の「⑤学校・ホームルームへの所属意識が高まった」はコース生の1年生と教室生の2年生で高い値を示しており、「⑥集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだした」はコース生の1年生で高い値を示している。またTable 8の「⑥他者への意識が高まった」も自共生徒の1年生と教室生の2年生で高い値を示しており、「⑬学校・ホームルームへの所属意識が高まった」はコース生の1年生と教室生の2年生で50%を超えている。

こうしたことから、ホームルームや学校行事、委員会活動及び生徒会活動などにおける特徴として、生徒の意識の変容を挙げることができ、特にコース生の1年生では比較的よく見られる特徴と言うこともできる。たくさん生徒に見られる特徴というわけではないものの、上記 (2) のような行動や人間関係の変容に加えて、自共生徒の集団や自分に対する意識の変容が示唆されるものであり、成果の1つと考えることができる。

IV. 今後の方策について

本調査を通して、自立支援コース及び共生推進教室において、他の高校生とともに活動することで得られた成果が明らかとなった。そこで、自共生徒が特別活動等を通して豊かな高校生活を送るために必要となる方策を以下に述べる。

特別活動全般に共通して「活動への参加や役割分担」ができる強みを活かした活動内容や形態による新たな学びを策定する必要がある。例えば、班やグループで話し合いや行動をともにする活動、一つの目標に向かって劇や催し物とともに練習・発表する活動、役割分担や協力による作業を有する活動などを意図的・計画的に実施する必要がある。授業には様々な形式があり、それぞれに教育的効果がある。集団活動を特質とする特別活動においては、集団における教育的効果を意図的に活動の中に組み込むことが重要である。

また、学年別の違いを考慮に入れることも必要である。すなわち、1年生の成果、2年生の成果を考えたうえで、特別活動の指導や活動内容に活かせるのではないかと考える。具体的には、コース生におけるホームルーム活動及び学校行事は1年生に与える影響は大きく、コース生における委員会活動及び生徒会活動、教室生の特別活動全般は2年生に与える影響が大きかつ

た。また、Table 7の質問項目「④役割分担に貢献した」の学年別における成果の特徴のように、項目別における特徴を捉え、指導内容や形態に活用できる。さらに、前述の成果を逆に捉えることも可能であり、一般的に課題になりうる項目を事前に把握することによって、課題の克服的・予防的な指導にも活用できる。一方で、本調査項目では明らかにできなかった他の成果も考えられる。加えて、自共生徒の様々な成果を個別に理解することも必要である。

謝辞

本研究の調査におきましては、ご多用中にもかかわらず、大阪府教育庁担当指導主事の先生をはじめ、知的障がい生徒自立支援コース及び共生推進教室設置校である高等学校の校長先生、諸先生方にもお世話になりました。本研究を進めるにあたり、大変貴重なものとなりました。心から感謝して、御礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 平野智之 (2013) インクルーシブな学びを創る－大阪・高校現場からの発信 第5回－障がいのある生徒があたりまえに学ぶ－. ヒューマンライツ, 306, 52-55.
- 廣瀬真琴・矢野裕俊・梶川裕司 (2010) 自主的な学校行事を通じた生徒の成長に関する事例研究. カリキュラム研究, 19, 71-83.
- 堀 正人・濱口常雄 (2018) 特別活動の指導に関する一考察－学校生活を楽しくする工夫－. 教職課程・実習支援センター研究年報, 1, 247-254.
- 川口 厚 (2018) 生徒指導の実践の場としての部活動の教育的意義－社会的なリテラシー育成の視点からの検討－. 桃山学院大学経済経営論集, 59 (4), 59-75.
- 岸本 肇 (2018) 部活動改革の立脚点. 研究論叢, 24, 39-47.
- 小林 誠 (2012) 学習指導要領からみる部活動に関する一考察. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊, 19 (2), 191-201.
- 河本愛子 (2014) 中学・高校における学校行事体験の発達の意義－大学生の回顧的意味づけに着目して－. 発達心理学研究, 25 (4), 453-465.
- 河本愛子 (2015) 中学・高校における学校行事体験の発達の意義－大学生の回顧的意味づけに着目して－. 発達心理学研究, 25 (4), 453-465.
- 文部科学省 (2009) 平成 21 年告示高等学校学習指導要領.
- 中村 豊 (2015) 児童生徒の社会的能力の育成に関する調査研究～特別活動の機能に着目した分析～. 教育学論究, 7, 131-143.
- 中村 豊・岡邑 衛 (2018) 学校における文化的行事の教育的意義と課題. 東京理科大学教職教育研究 3, 3-12.
- 織田 成和 (2011) 特別活動に関する現代的考察－改訂学習指導要領を根拠として－. 近畿大学工学部紀要.

- 人文・社会科学篇, 41, 39-61.
- 小野雄大・庄司一子 (2015) 部活動における先輩後輩関係の研究－構造, 実態に着目して－. 教育心理学研究, 63 (4), 438-452.
- 大阪府教育庁 (2017) 知的障がい生徒自立支援コース・共生推進教室の取組みの充実にむけて～10年間の成果をふまえて～.
- 白松 賢 (1997) 高等学校における部活動の効果に関する研究－学校の経営戦略の一視角－. 日本教育経営学会紀要, 39, 74-88.
- 鈴木 翔・岡邑 衛・歌川光一・中村 豊 (2019) 中学時の特別活動の参加経験と学級生活の関連性に関する検討－全国の大学生を対象にした質問紙調査の分析から－. 秋田大学教養基礎教育研究年報, 21, 55-65.
- 高瀬 博・長島康雄・久永哲雄 (2017) 高校時の「特別活動等」がコンピテンシー向上に及ぼす影響に関する一考察. 関東学園大学紀要, 25, 29-38.
- 樽木靖夫・石隈利紀 (2006) 文化祭での学級劇における中学生の小集団の体験の効果－小集団の発展, 分業的協力, 担任教師の援助介入に焦点をあてて－. 教育心理学研究, 54 (1), 101-111.
- 樽木靖夫・高田麻美 (2017) 児童会・生徒会活動の体験的学びに関する研究. 千葉大学教育学部研究紀要, 66 (1), 247-253.
- 富田幸子 (2005) 府立高校に「知的障害生徒自立支援コース」－大阪府の場合－. 人権と教育, 43, 38-44.
- 山口正和 (2011) 大阪の二重籍 (ダブルカウント) と原学級保障, そして今は. 福祉労働, 130, 63-71.
- 和田良彦 (2019) 大阪府の「ともに学び, ともに育つ」教育の推進－知的障がい生徒自立支援コース, 共生推進教室の取組み－. ヒューマンライツ, 371, 9-15.